
横浜市立みなと赤十字病院 外科専門研修プログラム



 **日本赤十字社** 横浜市立みなと赤十字病院
Japanese Red Cross Society

2025 年 4 月 30 日作成 第 1.12 版

目次

1. 横浜市立みなと赤十字病院外科専門研修プログラムについて	2
2. 研修プログラムの施設群	2
3. 専攻医の受け入れ数について	4
4. 外科専門研修について	
1) プログラムの概要	4
2) 年次毎の専門研修計画	5
3) 研修の週間計画および年間計画	7
5. 専攻医の到達目標（習得すべき知識・技能・態度など）	8
6. 各種カンファレンスなどによる知識・技能の習得（専攻医研修マニュアル-到達目標 3-参照）	8
7. 学問的姿勢について	9
8. 医師に必要なコアコンピテンシー、倫理性、社会性などについて（専攻医研修マニュアル-到達目標 3-参照）	9
9. 施設群による研修プログラムおよび地域医療についての考え方	
1) 施設群による研修	10
2) 地域医療の経験（専攻医研修マニュアル-経験目標 3-参照）	10
10. 専門研修の評価について（専攻医研修マニュアル-VI-参照）	11
11. 専門研修プログラム管理委員会について	11
12. 専攻医の就業環境について	11
13. 修了判定について	12
14. 外科研修の休止・中断、プログラム移動、プログラム外研修の条件	12
15. 専門研修実績記録システム、マニュアル等について 研修実績および評価の記録	12
16. 専攻医の採用と修了	
採用方法	13
研修開始届	13
修了要件	13

1. 横浜市立みなと赤十字病院外科専門研修プログラムについて

横浜市立みなと赤十字病院は山下公園、中華街など横浜市の中心部に隣接し、地域医療支援病院、がん診療連携拠点病院として横浜南部医療圏の地域医療の中核を担う634床の総合病院です。さらに、日本有数の救急車受け入れ台数（年間約14000台）を誇る救命救急センターを有しています。また、赤十字病院の使命である災害医療にも積極的に取り組む、災害拠点病院です。

本プログラムは、横浜市立みなと赤十字病院を基幹施設として、横浜南部医療圏の近隣の3病院、および横須賀・三浦医療圏の中核病院である横須賀共済病院を連携施設として作成された地域完結型のプログラムです。

横浜市立みなと赤十字病院外科専門研修プログラムの目的と使命は以下の5点です。

- 1) 専攻医が医師として必要な基本的診療能力を習得すること
- 2) 専攻医が外科領域の専門的診療能力を習得すること
- 3) 上記に関する知識・技能・態度と高い倫理性を備えることにより、患者に信頼され、標準的な医療を提供でき、プロフェッショナルとしての誇りを持ち、患者への責任を果たせる外科専門医となること
- 4) 外科専門医の育成を通して国民の健康・福祉に貢献すること
- 5) 外科領域全般からサブスペシャリティ領域（消化器外科、心臓血管外科、呼吸器外科、小児外科、乳腺、内分泌外科）またはそれに準じた外科関連領域の専門研修を行い、それぞれの領域の専門医取得へと連動すること

本プログラムでは、横浜市、横須賀市内で3年間勤務し、その中で外科全般の基本的診療能力を身に着けるとともに、地域密着型の外科診療から最先端の外科診療までを幅広く、かつバランスよく経験できるように配慮されています。さらに、各サブスペシャリティ領域の専門研修を本プログラム内で開始し、それぞれの領域の専門医へと連動できるように配慮されています。

2. 研修プログラムの施設群

横浜市立みなと赤十字病院と連携施設（4施設）により専門研修施設群を構成します。本専門研修施設群では13名の専門研修指導医が専攻医を指導します。

基幹施設および連携施設の概要は以下の通りです。

専門研修基幹施設

名称	都道府県	1:消化器外科,2:心臓血管外科,3:呼吸器外科,4:小児外科,5:乳腺内分泌外科,6:その他(救急含む)	統括責任者名
横浜市立みなと赤十字病院	神奈川県	1.2.3.4.5.6.	杉田 光隆

横浜市立みなと赤十字病院の外科は、消化器・一般外科、心臓血管外科、呼吸器外科、乳腺外科に大きく分かれ、専門性を重視しつつ外科系各科が密に連携をとる診療体制を引いています。

消化器・一般外科では食道・胃外科、大腸外科、肝胆膵外科など臓器別の各専門医を中心に診療を行っており、また小児単径ヘルニア、虫垂炎等の小児外科領域の手術や緊急手術も積極的に施行しています。令和5年度のNCD登録手術件数は758例です。腹腔鏡下手術も安全性に十分配慮しながら適応を拡大しており、令和元年度のNCD登録消化器手術件数中413例が腹腔鏡下手術でした。大腸癌は全手術のうち90%以上（直腸切断術、ISR、側方郭清も含む）、胃癌もほぼ全例（胃全摘、噴門側胃切除、粘膜下腫瘍に対するLECSを含む）を腹腔鏡で行っています。ロボット支援下手術の導入も勧めており、直腸癌手術には保険収載直後よりロボット支援下手術を積極的に導入し、現在では直腸癌の鏡視下手術の大部分がロボット支援下手術となっています。結腸癌にもロボット手術を導入し、その適応を拡大しています。胃癌も昨年度よりロボット手術を導入し、鏡視下手術の多くがロボット支援下手術となっています。

乳腺外科はより専門性を高めるために外科から独立し、乳房再建を積極的に行うなど、神奈川県内トップレベルの診療実績を挙げています。令和5年度のNCD登録手術件数は262例です。また、年間1000件程度の外来化学療法を施行しており、手術のみならず、がんの集学的治療について学ぶことができます。

心臓血管外科は専門医認定機構に基幹施設として登録されており、弁膜症と冠動脈、および大血管領域の大型の手術、さらに大動脈瘤に対するステントグラフト内挿術を積極的に施行し、緊急手術症例も急増しています。平成29年度にはハイブリッド手術室も整備し、最新の手術が行える環境が整っています。令和5年度のNCD登録手術件数は心臓・大血管手術が236例、末梢血管手術が39例です。

呼吸器外科では縦隔腫瘍、気胸症例はほぼ全例胸腔鏡下手術で、肺癌手術でも積極的に低侵襲な胸腔鏡下肺葉切除術を行っております。令和5年度のNCD登録手術件数は91例で、うち胸腔鏡下手術84例です。

実際に平成 29～令和 2 年度に横浜市立みなと赤十字病院で採用した外科後期研修医が研修 1 年目で経験した手術件数は平均 223 例（術者 121 例）でした。

専門研修連携施設

No.	名称	都道府県	研修領域	連携施設担当者名
1	横浜市立大学附属病院	神奈川県	1.5	田 鍾寛
2	恵仁会松島病院	神奈川県	1.	河野 洋一
3	横浜保土ヶ谷中央病院	神奈川県	1.2.3.5.6	武田 和永
4	横須賀共済病院	神奈川県	1.2.3.4.5.6	大田 洋平

本プログラムでは、上記の 4 施設を連携施設としています。

1. 横浜市立大学附属病院は、横浜市南部に位置する大学病院で、特に消化器・腫瘍外科では肝胆膵の非常に高難度な手術を多数手がけており、一般病院では経験が難しい高難度な手術および学術研究を経験できます。令和 5 年度の NCD 登録手術件数は 1,534 例です。
2. 恵仁会松島病院は、肛門疾患診療で全国トップレベルの実績を挙げる大腸肛門疾患専門病院で、痔核および痔瘻の手術は年間 4000 例前後施行しています。直腸肛門疾患の専門的な診療知識および技術が習得できます。令和 5 年度の NCD 登録手術件数は 4,612 例です。
3. 横浜保土ヶ谷中央病院は、横浜市保土ヶ谷区の地域医療を支える地域密着型の総合病院で、より地域に密着した臨床現場を経験できます。令和 5 年度の NCD 登録手術件数は 296 例です。
4. 横須賀共済病院は、横須賀市中心に位置し、横須賀・三浦医療圏の中核病院として地域医療を支える総合病院であり、当院と同様、最先端の外科診療を多数例経験できます。神奈川県内の異なる医療圏での研修を目的に、本年度より新たに連携施設として加わりました。令和 5 年度の NCD 登録手術件数は 1,811 例です。

3. 専攻医の受け入れ数について（外科専門研修プログラム整備基準 5.5 参照）

本専門研修施設群の 3 年間 NCD 登録数は約 7,500 例で、専門研修指導医は 11 1/6 名のため、本年度の募集専攻医数は 2 名です。

4. 外科専門研修について

1) プログラムの概要

外科専門医は初期臨床研修修了後、3年（以上）の専門研修で育成されます。

- 3年間の専門研修期間中、各連携施設で最低3カ月以上の研修を行い、残りの期間をみなと赤十字病院で研修します。
- 専門研修の3年間の1年目、2年目、3年目には、それぞれ医師に求められる基本的診療能力・態度（コアコンピテンシー）と外科専門研修プログラム整備基準にもとづいた外科専門医に求められる知識・技術の習得目標を設定し、その年度の終わりに達成度を評価して、基本から応用へ、さらに専門医としての実力をつけていくように配慮します。具体的な評価方法は後の項目で示します。
- サブスペシャリティ領域によっては外科専門研修を修了し、外科専門医資格を習得した年の年度初めに遡ってサブスペシャリティ領域専門研修の開始と認める場合があります。サブスペシャリティ領域連動型については現時点では未定です。
- 本プログラムでは、3年目のうち、外科専門医に必要な経験症例数、知識、および技能を習得した後の残りの期間、希望のサブスペシャリティ領域での研修が可能です。
- 研修プログラムの修了判定には規定の経験症例数が必要です。研修中、研修病院、および病院内の外科系研修各科を2年間研修することによる規定の経験症例数はほぼクリアできるようにプログラムが組まれています。（専攻医研修マニュアル-経験目標 2-を参照）
- 初期臨床研修期間中に外科専門研修基幹施設ないし連携施設で経験した症例（NCDに登録されていることが必須）は、研修プログラム統括責任者が承認した症例に限定して、手術症例数に加算することができます。（外科専門研修プログラム整備基準 2.3.3 参照）

2) 年次毎の専門研修計画

- 専攻医の研修は、毎年達成目標と達成度を評価しながら進められます。以下に年次毎の研修内容・習得目標の目安を示します。なお、習得すべき専門知識や技能は専攻医研修マニュアルを参照してください。
- 専門研修1年目では、基本的診療能力および外科基本的知識と技能の習得を目標とします。専攻医は定期的に開催されるカンファレンスや症例検討会、抄読会、院内主催のセミナーの参加、e-learning や書籍や論文などの通読、日本外科学会が用意しているビデオライブラリーなどを通して自らも専門知識・技能の習得を図ります。また、学会・研究会への参加、発表などを通して専門知識・技能の習得を図ります。
- 専門研修2年目では、基本的診療能力の向上に加えて、外科基本的知識・技能を実際の診断・治療へ応用する力量を養うことを目標とします。専攻医は引き続き学会・研究会への参加、発表などを通して専門知識・技能の習得を図ります。
- 専門研修3年目では、それまでの2年間で身に付けた基本的診療能力および専門知識を用いてチーム医療において責任を持って診療にあたり、後進の指導にも参

画し、リーダーシップを発揮して、外科の実践的知識・技能の習得により様々な外科疾患へ対応する力量を養うことを目標とします。カリキュラムを習得したと認められる専攻医には、積極的にサブスペシャリティ領域専門医取得に向けた技能研修へ進みます。さらに、学会・研究会への参加、発表に加え、論文作成を行い、学問的姿勢をさらに高めていきます。

(具体例)

下図に横浜市立みなと赤十字病院外科研修プログラムの例を示します。専門研修1・3年目および2年目の一部は基幹施設、2年目の残りは連携施設での研修です。それぞれの施設は横浜市の隣接した医療圏に存在します。

	4月-6月	7月-9月	10月-12月	1月-3月
1 年次	横浜市立みなと赤十字病院			
	消化器・一般外科			乳腺外科
2 年次	連携施設A	連携施設B	横浜市立みなと赤十字病院	
			呼吸器外科	心臓血管外科
3 年次	横浜市立みなと赤十字病院			
	消化器・一般外科		サブスペシャリティー選択	

横浜市立みなと赤十字病院外科研修プログラムでの3年間の施設群ローテーションにおける研修内容と予想される経験症例数を下記に示します。

横浜市立みなと赤十字病院外科研修プログラムの研修期間は3年間としていますが、習得が不十分な場合は習得できるまで期間を延長することになります(未修了)。一方で、カリキュラムの技能を習得したと認められた専攻医には、積極的にサブスペシャリティ領域専門医取得に向けた技能教育を開始することができます。

- ・ 専門研修1年目

横浜市立みなと赤十字病院に所属し研修を行います。

一般外科/麻酔/救急/病理/消化器/心・血管/呼吸器/小児/乳腺・内分泌

経験症例200例以上(術者80例以上)

- ・ 専門研修2年目

連携施設群に 6-9 カ月、横浜市立みなと赤十字病院に 3-6 カ月所属し研修を行います。

一般外科/麻酔/救急/病理/消化器/心・血管/呼吸器/小児/乳腺・内分泌

経験症例350例以上/2年（術者120例以上/2年）

- ・ 専門研修 3 年目

原則として横浜市立みなと赤十字病院で研修を行います。不足症例に関して各領域をローテートした後、残りの期間、希望のサブスペシャリティ領域の研修を行います。

（サブスペシャリティ領域などの専門医連動コース）

みなと赤十字病院でサブスペシャリティ領域（消化器外科、心臓・血管外科、呼吸器外科、乳腺外科）またはそれに準じた外科関連領域の専門研修を開始します。

3) 研修の週間計画および年間計画

基幹施設（みなと赤十字病院外科例）

	月	火	水	木	金	土	日
8:00-8:30 朝カンファレンス							
8:00-17:00 病棟業務							
9:00-12:00 午前外来							
9:00- 手術							
13:00-16:00 午後外来（急患番）							
15:00-16:00 外科術前術後カンファレンス							
17:00- 外科術前術後カンファレンス							

連携施設（恵仁会松島病院例）

	月	火	水	木	金	土	日
7:45-8:30 朝カンファレンス							
8:00-8:30 朝カンファレンス							
8:30- 手術							
13:00- 手術							
8:30-12:00 午前病棟回診・業務							
8:30-12:00 午前外来							
13:00-16:00 午後外来							
8:30-12:00 午前検査（内視鏡、超音波）							
13:00-16:00 午後検査（内視鏡、超音波）							

17:00-19:00 勉強会（2 か月に 1 回）							
17:00-19:00 症例検討会							

研修プログラムに関連した全体行事の年間スケジュール（案）

月	全体行事予定
4	- 外科専門研修開始。専攻医および指導医に提出用資料の配布（横浜市立みなと赤十字病院ホーム ページ） - 日本外科学会参加（発表）
5	研修修了者：専門医認定審査申請・提出
8	研修修了者：専門医認定審査（筆記試験）
11	臨床外科学会参加（発表）
2	- 専攻医：研修目標達成度評価報告用紙と経験症例数報告用紙の作成（年次報告）（書類は翌月に提出） - 専攻医：研修プログラム評価報告用紙の作成（書類は翌月に提出） - 指導医・指導責任者：指導実績報告用紙の作成（書類は翌月に提出）
3	- その年度の研修終了 - 専攻医：その年度の研修目標達成度評価報告用紙と経験症例数報告用紙を提出 - 指導医・指導責任者：前年度の指導実績報告用紙の提出 - 研修プログラム管理委員会開催

5. 専攻医の到達目標（習得すべき知識・技能・態度など）

- 専攻医研修マニュアルの到達目標 1（専門知識）、到達目標 2（専門技能）、到達目標 3（学問的姿勢）、到達目標 4（倫理性、社会性など）を参照してください。

6. 各種カンファレンスなどによる知識・技能の習得（専攻医研修マニュアル-到達目標 3-参照）

- 基幹施設および連携施設それぞれにおいて医師および看護スタッフによる治療および管理方針の症例検討会を行い、専攻医は積極的に意見を述べ、同僚の意見を聴くことにより、具体的な治療と管理の論理を学びます。
- 放射線診断・病理合同カンファレンス（消化管、肝胆膵）：手術症例を中心に消化器内科、放射線診断部とともに術前画像診断を検討し、切除検体の病理診断と対比します。
- Cancer Board：複数の臓器に広がる進行・再発例や、重症の内科合併症を有す

る症例、非常に稀で標準治療がない症例などの治療方針決定について、内科など関連診療科、病理部、放射線科、緩和、看護スタッフなどによる合同カンファレンスを行います。

- 基幹施設と連携施設による症例検討会：各施設の専攻医や若手専門医による研修発表会を毎年2月に横浜市立みなと赤十字病院内の施設を用いて行い、発表内容、スライド資料の良否、発表態度などについて指導的立場の医師や同僚・後輩から質問を受けて討論を行います。
- 各施設において抄読会や勉強会を実施します。専攻医は最新のガイドラインを参照するとともにインターネットなどによる情報検索を行います。
- 大動物を用いたトレーニング設備や教育DVDなどを用いて積極的に手術手技を学びます。
- 日本外科学会の学術集会（特に教育プログラム）、e-learning、その他各種研修セミナーや各病院内で実施される講習会などで下記の事柄を学びます。
 - ◇ 標準的医療および今後期待される先進的医療
 - ◇ 医療倫理、医療安全、院内感染対策

7. 学問的姿勢について

専攻医は、医学・医療の進歩に遅れることなく、常に研鑽、自己学習することが求められます。患者の日常的診療から浮かび上がるクリニカルクエスチョンを日々の学習により解決し、今日のエビデンスでは解決し得ない問題は臨床研究に自ら参加、もしくは企画する事で解決しようとする姿勢を身につけます。学会には積極的に参加し、基礎的あるいは臨床的研究成果を発表します。さらに得られた成果は論文として発表し、公に広めるとともに批評を受ける姿勢を身につけます。

研修期間中に以下の要件を満たす必要があります。（専攻医研修マニュアル-到達目標3-参照）

- 日本外科学会定期学術集会に1回以上参加
- 指定の学術集会や学術出版物に、筆頭者として症例報告や臨床研究の結果を発表

8. 医師に必要なコアコンピテンシー、倫理性、社会性などについて（専攻医研修マニュアル-到達目標3-参照）

医師として求められるコアコンピテンシーには態度、倫理性、社会性などが含まれています。内容を具体的に示します。

- 1) 医師としての責務を自律的に果たし信頼されること（プロフェッショナリズム）
 - 医療専門家である医師と患者を含む社会との契約を十分に理解し、患者、家族が

ら信頼される知識・技能および態度を身につけます。

2) 患者中心の医療を実践し、医の倫理・医療安全に配慮すること

- 患者の社会的・遺伝学的背景もふまえ患者ごとに的確な医療を目指します。
- 医療安全の重要性を理解し事故防止、事故後の対応をマニュアルに沿って実践します。

3) 臨床の現場から学ぶ態度を習得すること

- 臨床の現場から学び続けることの重要性を認識し、その方法を身につけます。

4) チーム医療の一員として行動すること

- チーム医療の必要性を理解しチームのリーダーとして活動します。
- 的確なコンサルテーションを実践します。
- 他のメディカルスタッフと協調して診療にあたります。

5) 後輩医師に教育・指導を行うこと

- 自らの診療技術、態度が後輩の模範となり、また形成的指導が実践できるように学生や初期研修医および後輩専攻医を指導医とともに受け持ち患者を担当し、チーム医療の一員として後輩医師の教育・指導を担います。

6) 保健医療や主たる医療法規を理解し、遵守すること

- 健康保険制度を理解し保健医療をメディカルスタッフと協調し実践します。
- 医師法・医療法、健康保険法、国民健康保険法、老人保健法を理解します。
- 診断書、証明書が記載できます。

9. 施設群による研修プログラムおよび地域医療についての考え方

1) 施設群による研修

本研修プログラムでは横浜市立みなと赤十字病院を基幹施設とし、地域の連携施設とともに病院施設群を構成しています。専攻医はこれらの施設群をローテートすることにより、多彩で偏りのない充実した研修を行うことが可能となります。これは専攻医が専門医取得に必要な経験を積むことに大変有効です。地域中核総合病院である横浜市立みなと赤十字病院だけの研修では経験が不十分となる領域について、地域の連携病院で多彩な症例を経験することで、外科医として必要な各専門領域の基本的な力および専門的な知識、さらに学問的姿勢を獲得します。このような理由から施設群内の複数の施設で研修を行うことが非常に大切です。横浜市立みなと赤十字病院外科研修プログラムに従い研修を行うことで外科専門医に必要な経験、知識、および技能を身につけられるように十分配慮します。

施設群における研修の順序、期間等については、専攻医数や個々の専攻医の希望と研修進捗状況、各病院の状況、地域の医療体制を勘案して、横浜市立みなと赤十字病

院外科専門研修プログラム管理委員会が決定します。

2) 地域医療の経験（専攻医研修マニュアル・経験目標 3- 参照）

地域の連携病院では責任を持って多くの症例を経験することができます。また、地域医療における病診・病病連携、地域包括ケア、在宅医療などの意義について学ぶことができます。以下に本研修プログラムにおける地域医療についてまとめます。

- 本研修プログラムの連携施設には、その地域における地域医療の拠点となっている施設（地域中核病院、地域中小病院）が入っています。そのため、連携施設での研修中に以下の地域医療（過疎地域も含む）の研修が可能です。
- 地域の医療資源や救急体制について把握し、地域の特性に応じた病診連携、病病連携のあり方について理解して実践します。
- 消化器がん患者の緩和ケアなど、ADLの低下した患者に対して、在宅医療や当院緩和ケア病棟などを活用した医療を立案します。

10. 専門研修の評価について（専攻医研修マニュアル・VI- 参照）

専門研修中の専攻医と指導医の相互評価は施設群による研修とともに専門研修プログラムの根幹となるものです。

専門研修の1年目、2年目、3年目のそれぞれに、コアコンピテンシーと外科専門医に求められる知識・技能の習得目標を設定し、その年度の終わりに達成度を評価します。このことにより、基本から応用へ、さらに専門医として独立して実践できるまで着実に実力をつけていくように配慮しています。専攻医研修 マニュアル VI を参照してください。

11. 専門研修プログラム管理委員会について（外科専門研修プログラム整備基準 6.4 参照）

基幹施設である横浜市立みなと赤十字病院には、専門研修プログラム管理委員会と、専門研修プログラム統括責任者を置きます。連携施設群には、専門研修プログラム連携施設担当者と専門研修プログラム委員会組織が置かれます。横浜市立みなと赤十字病院専門研修プログラム管理委員会は、専門研修プログラム統括責任者（委員長）、副委員長、事務局代表者、外科の4つの専門分野（消化器外科、心臓血管外科、呼吸器外科、乳腺外科）の研修指導責任者、および連携施設担当委員などで構成されます。研修プログラムの改善へ向けての会議には専門医取得直後の若手医師代表が加わります。専門研修プログラム管理委員会は、専攻医および専門研修プログラム全般の管理と、専門研修プログラムの継続的改良を行います。

12. 専攻医の就業環境について

- 1) 専門研修基幹施設および連携施設の外科責任者は専攻医の労働環境改善に努めます。
- 2) 専門研修プログラム統括責任者または専門研修指導医は専攻医のメンタルヘル스에配慮します。
- 3) 専攻医の勤務時間、当直、給与、休日は労働基準法に準じて各専門研修基幹施設、各専門研修連携施設の施設規定に従います。

13. 修了判定について

3年間の研修期間における年次毎の評価表および3年間の実地経験目録にもとづいて、知識・技能・態度が専門医試験を受けるのにふさわしいものであるかどうか、症例経験数が日本専門医機構の外科領域研修委員会が要求する内容を満たしているものであるかどうかを、専門医認定申請年（3年目あるいはそれ以後）の3月末に研修プログラム統括責任者または研修連携施設担当者が研修プログラム管理委員会において評価し、研修プログラム統括責任者が修了の判定をします。

14. 外科研修の休止・中断、プログラム移動、プログラム外研修の条件

専攻医研修マニュアルVIIIを参照してください。

15. 専門研修実績記録システム、マニュアル等について

研修実績および評価の記録

外科学会のホームページにある書式（専攻医研修マニュアル、研修目標達成度評価報告用紙、専攻医研修実績記録、専攻医指導評価記録）を用いて、専攻医は研修実績（NCD 登録）を記載し、指導医による形成的評価、フィードバックを受けます。総括的評価は外科専門研修プログラム整備基準に沿って、少なくとも年1回行います。

横浜市立みなと赤十字病院外科にて、専攻医の研修履歴（研修施設、期間、担当した専門研修指導医）、研修実績、研修評価を保管します。さらに専攻医による専門研修施設および専門研修プログラムに対する評価も保管します。

プログラム運用マニュアルは以下の専攻医研修マニュアルと指導者マニュアルを用います。

◇ 専攻医研修マニュアル

別紙「専攻医研修マニュアル」参照。

◇ 指導者マニュアル

別紙「指導医マニュアル」参照。

◇ 専攻医研修実績記録フォーマット

「専攻医研修実績記録」に研修実績を記録し、手術症例は NCD に登録します。

◇ 指導医による指導とフィードバックの記録

「専攻医研修実績記録」に指導医による形成的評価を記録します。

16. 専攻医の採用と修了

採用方法

横浜市立みなと赤十字病院外科専門研修プログラム管理委員会は、毎年 4 月から病院見学、説明会等を行い、外科専攻医を募集します。当プログラムへの応募をご希望の方は、8 月 30 日までに研修プログラム責任者宛に所定の形式の『横浜市立みなと赤十字病院外科専門研修プログラム応募申請書・履歴書』、医師免許証（コピー）、臨床研修修了登録証または修了見込証明書、健康診断書を提出してください。申請書は(1) 横浜市立みなと赤十字病院臨床教育研修センター website (<http://www.yokohama.jrc.or.jp/rinsho/index.html>)よりダウンロード、(2)電話で問い合わせ(045-628-6100)、(3)臨床教育研修センターへ e-mail で問い合わせ (minato@yokohama.jrc.or.jp)、のいずれの方法でも入手可能です。その上で、10 月 1 日～11 月 1 日の間に日本外科学会のホームページ (<http://www.jssoc.or.jp>) 上で web 登録を行って下さい。10 月までに書類選考および面接を行い、採否を決定して 10 月 26 日までの間に本人に文書で通知します。応募者および選考結果については 2 月の横浜市立みなと赤十字病院外科専門研修プログラム管理委員会において報告します。1 次募集で採用定員に満たなかった場合、12 月 1 日から 2 次募集を行う予定です。

(2023 年度の日本外科学会および日本専門医機構よりの採用情報に基づいています。採用方法、申請期間等については今後変更となる可能性があります。日本専門医機構、日本外科学会のホームページの情報も参考にして下さい。)

研修開始届

研修を開始した専攻医は、各年度の 3 月 31 日までに以下の専攻医氏名報告書を、日本外科学会事務局 (senmoni@jsog.or.jp) および、外科研修委員会に提出します。

- ・ 専攻医の氏名と医籍登録番号、日本外科学会会員番号、専攻医の卒業年度
- ・ 専攻医の履歴書（様式15-3号）
- ・ 専攻医の初期研修修了証

修了要件

専攻医研修マニュアル参照